



IDIOTICA

阿呆物語

最狂編

湖南徹

私は世界最強のアホだった

私は、この日、自分がアホである事を知らされました。

笑うしかありませんでした。

だって、そうでしょう。

子供の頃から「あなたは賢いのよ。頑張れば何でも出来るのよ。頑張れば何にでもなれるのよ」と言われ続けたのに、突然「残念でした。あなたはアホでした。いくら頑張ろうと何も出来ません。いくら頑張ろうと何にもなりません」と教えられたのですから。

二十数年間騙され続けた私は、底無しのアホに違いありません。私程のアホは、世界中どこを探してもいないでしょう。

私は腹を抱えて笑いました。

ガハハ、ホホホ、ヒヒヒ、ヘヘヘ、ケケケ、コココ、リリリ、ジジジ、ヤヤヤ、と色々笑いました。

あまりにも激しく笑っていたので、自分がどこにいたのかを忘れてしまいました。

「何をやってる、馬鹿！ 轢き殺されたいのか！」

と、怒声が耳に入りました。

それと同時に、糞馬鹿でかい過積載の一〇トントラックが、法定速度をはるかに上回る速度で私の横を通り去りました。

そうです。

私は道路——国道3号線——のど真ん中で笑っていたのです。

アホなものですから、道路のど真ん中で笑うのが危険だ、というのが理解出来なかったのです。

ですから、私は笑い続けました。

喧しいクラクションが響きます。真っ黒なベンツS600でした。最新モデルではなく、過剰にでかい、重い、環境にまるで配慮されていない、と欧州で酷評されたW140型です。メッキの部分が金色で、非常に趣味が悪いです。

私が道路を塞いでしまった為、道路上で立ち往生していました。

「おい、馬鹿！ さっさと退け！ 轢き殺すぞ！」

と、運転手が叫びました。パンチパーマで、口髭を蓄え、サングラスを着けていました。ヤクザ映画に出てくる低級なチンピラそのもので、非常に人相が悪いです。趣味の悪いベンツに乗っている連中は皆こうなのでしょう。

「残念でした。私はアホです。馬鹿ではありません。ですから退きません」

と言うと、私はベンツS600の広いボンネットに飛び乗り、トランポリンでやる様にジャンプしました。「私はアホです！ アホです！ アホです！」

人相の悪い運転手は蒼白になりました。ベンツS600から下車すると、

「ば、馬鹿！ 何をやってる！」

「見て分からないのですか？ ボンネットの上で飛び跳ねています。それも分からないなんて、あなたは馬鹿ですね。私はアホですけど」

人相の悪い運転手は、顔を蒼から赤にしました。信号の様です。自動車を運転していると信号と否応なしに付き合う事になるので、そうなるのでしょう。

「てめえ、ふざけやがって！ 引きずり下ろしてやらあ！」

と、叫ぶと、毛むくじらの手で私に掴みかかろうとしました。

「私はアホかも知れませんが、あなたの様な馬鹿には捕まりません」

と、私は宣言すると、ベンツS600の屋根に飛び乗りました。そこで飛び跳ね続けました。あまりにも勢いよく飛び跳ねたので、屋根が凹み始めました。分厚いフロントガラスにもヒビが入ります。

「止めろ！」

「私はアホなので、止めなくてもいいのです。馬鹿だと止めなければなりません」

「てめえ！ ぶっ殺してやる！」

と、人相の悪い運転手は叫ぶと、ベンツS600の屋根に飛び乗りました。

私はアホですが、相手が来るのを待っている様な馬鹿ではありません。屋根の上で飛び跳ねるのも飽きていました。ですから、ベンツS600からさっと下りました。

人相の悪い運転手は、やっとの事で自分の車の屋根によじ登ったのに、私が下りてしまったのを見て、激怒しました。

「おい、待て！ 逃げるな！」

「え？ あなたは先程私に下りろ、て言いませんでしたか？」

「まあ、言ったが……」

「じゃあ、いいじゃないですか。では、さようなら」

と、私は去ろうとしました。

「待て！ 弁償しろ！」

最近、金で解決を図ろうとする間抜けが多過ぎます。金なんて所詮綺麗に印刷された紙切れに過ぎないのにです。何故そんなものに執着するのでしょうか。世の中全体が馬鹿になりつつあるのでしょうか。そんな中で私の様なアホは貴重な存在かも知れません。

「私はアホですよ。金なんてありません。金を得る事が出来ないのです。他を当たって下さい」

「この野郎、ふざけやがって！」

人相の悪い運転手は、屋根から下り、運転席に戻ると、アクセルをふかしました。流石馬鹿です。環境に悪い事も平気でやります。

「轢き殺してやる！」

「アホでも人間です。轢き殺すと罪になるんじゃないですか？」

「うるせえ！」

と、人相の悪い運転手は叫ぶと、ベンツS600を私に向かって発進させました。六リットルのV12エンジンを不法改造しているらしく、二トンのセダンは僅か二秒で時速一〇〇キロにまで加速しました。

通常の間人なら、そのまま轢き殺されていたでしょう。

ただ、私はアホです。

アホは頭が軽いです。その分早く走れます。

私はスタンディングポジションから一・五で時速一五〇キロにまで加速しました。前を走っていた車を次々追い越しました。

「おい、畜生！ 待て！」

と、人相の悪い運転手は叫びながら、私を追いました。ぐんぐん加速します。

私はアホで、頭が軽く、その分足が速いですが、やはり人間です。持久力に限界があります。時速一五〇キロで走っていると、流石に足が疲れます。

休憩する事にしました。

私は路肩にさっと移動すると、舗装面に腰を降ろしました。

ベンツS600は、ドイツが誇る超高級車で、強力なディスクブレーキを装備していますが、所詮自動車です。急に止まれません。そのままオーバーランしました。

人相の悪い運転手は、ブレーキを思い切り踏みました。

ベンツS600は、車体を前のめりにし、タイヤをキーッと軋ませて止りました。横転しなかったのは運が良かったとしか言い様がありません。

「おい！ 馬鹿野郎！ 止るな！」

「え？ 止ったら駄目だったのですか？ 止ってほしくなかったのですか？」

「うるせえ！ 俺に黙って轢き殺されろ！」

「巻き殺されるのは駄目ですか？」

「いや、轢き殺されろ！」

「炊き殺されるのは駄目ですか？」

「いや、轢き殺されろ！」

「履き殺されるのは駄目ですか？」

「いや、轢き殺されろ！」

「泣き殺されるのは駄目ですか？」

「いや、轢き殺されろ！」

「描き殺されるのは駄目ですか？」

「うるさい！ 黙って轢き殺されろ！」

「私はアホですが、馬鹿ではないのです。自殺願望はありません」

「うるせえ！」

人相の悪い運転手は巧みなハンドルさばきでベンツS600をぐるりと反転させると、私に向かって突進してきました。

私はベンツS600がぎりぎり迫ってくるまで待って、地面を蹴り、高くジャンプしました。アホとあって、頭が軽いです。新体操の様にグルグルと回転しながら宙を舞いました。

人相の悪い運転手は、私が視野から消えたのを知って、急ブレーキをかけました。残念ながら、車は急に止れません。まして、二トンあるベンツです。惰性もあります。

ベンツS600は平屋建てのみすぼらしい家屋に激突しました。物凄い破壊音と共に低級建材で出来た壁を突き破り、家屋の内部にまで侵入しました。

家屋の中でくつろいでいた住人は、当然ながら驚きました。

「おい、お前！ 車で侵入するな！」

人相の悪い運転手は、反論しました。

「馬鹿を轢き殺そうとしてたんだ！ 文句言うな、タコ」

「何を言う！」

住人は、運転手に劣らず醜悪な人相でした。前科三五犯の極悪人の様です。

ただちに殴り合いの大喧嘩になりました。血が飛び散ります。肉が肉を打つ音が辺りに響きました。

素晴らしい殴り合いです。下手なボクシングタイトル戦より見ていて面白いです。

無事に地面に降り立った私は、二人に声をかけました。

「仲良く喧嘩して下さいね。では、私はこれで」

住人と運転手は、去ろうとする私を見て、

「おい、馬鹿、帰るな！」

「何度も言っているでしょう。私はアホです。馬鹿じゃありません。覚えが悪いですな。流石馬鹿です。いえ、間抜けかも知れませんね」

と言うと、一気に時速一五〇キロにまで加速して、その場から逃げました。

アホだと体力回復が早いので、非常に便利です。

「おい、馬鹿、帰るな！ 待て！」

と、後方で喚く声がしましたが、当然の事の様は無視しました。

アホかも知れませんが、馬鹿ではないのです。待てと言われて待つ訳がありません。そういうのは馬鹿がやる事です。

馬鹿は世界のゴミです。

カスです。

屑です。

ウンコです。

ゲロです。

ウジムシです。

ゲジゲジです。

馬鹿は一人残らず撲殺されるべきです。

絞殺されるべきです。

毒殺されるべきです。

扼殺されるべきです。

虐殺されるべきです。

薬殺されるべきです。

謀殺されるべきです。

悩殺されるべきです。

忙殺されるべきです。

捕殺されるべきです。

一人残らず死んだところで、誰も困りませんし。アホの様に不滅ではないので、簡単に殺せるでしょう。馬鹿に対し「死んでくれ」と要請するだけで喜んで死んでくれるかも知れません。誰か、やってくれないでしょうか。

とにかく、これからもアホの道を突き進もう、と私は誓いました。

私は世界最強のアホだった その2

「おい、馬鹿、帰るな！ 待て！」

と、後方から声がかかりましたが、私は当然ながら無視し続け、時速一二六キロで走りました。

当たり前でしょう。

私はアホなのです。馬鹿ではありません。

馬鹿は、「止まれ」と呼びかけられると止まってしまいます。ですが、アホは「止まれ」と呼びかけられたくらいで止まりません。止まる理由が分からないからです。分からないのだから、言われた通りにする訳がありません。

「おい、馬鹿！ 待て！」

と、再度後方から声がかかりました。

声をかけている者は相当な馬鹿です。

アホに対し「止まれ」なんて無駄な事を言い続けているのですから。馬鹿は学習力がゼロです。だからこそ馬鹿なのですが。

私はますます速く走りました。

時速一五四キロに達しました。

アホは頭が軽い上、自己制御が利き難いので、足を速く動かせるのです。

それでも、時速一五〇キロを超えるなんて、自分でもちょっと驚きです。アホには無限の可能性がある様です。アホで良かったです。

車道を走行している自動車を次々追い越しました。

「おい、馬鹿！ 待て！ 止まれ！ 止まるんだ！」

私は呆れました。

何故無駄な事を叫び続けるのでしょうか。余程の馬鹿です。

馬鹿は世界のゴミです。

カスです。

屑です。

ウンコです。

ゲロです。

ウジムシです。

ゲジゲジです。

馬鹿は一人残らず撲殺されるべきです。

絞殺されるべきです。

毒殺されるべきです。

扼殺されるべきです。

虐殺されるべきです。

薬殺されるべきです。

謀殺されるべきです。

悩殺されるべきです。

忙殺されるべきです。

捕殺されるべきです。

一人残らず死んだところで、誰も困りませんし。アホの様に不滅ではないので、簡単に殺せるでしょう。馬鹿に対し「死んでくれ」と要請するだけで喜んで死んでくれるかも知れません。誰か、やってくれないでしょうか。

「おい、馬鹿！ 待て！ 止まれ！ 止まるんだ！」

私は無視し続けました。

と、その時。

「おい、馬鹿！ 止まれと言っただろうが！」

……の声と共に、私は肩を掴まれました。

肩を掴まれると、流石のアホでも時速一六〇キロで走れません。

足が止まってしまいました。

残念ながら、腕だけは急に止まれません。五〇メートルもオーバーランして、漸く止まりました。勢いを失った手が、ポテッと地面に落ちます。

「あーあ、腕が伸びてしまった」

と、私はぼやきました。五〇メートル先にまで伸びてしまった腕を急いで巻き上げると、肩を掴んだ者に目を向けました。

私の肩を掴んだのは、制服姿の、がっしりした体格の人物でした。立派な髭を蓄えているので、男性の様です。最近では口髭や顎鬚を生やす女性も増えていますので、確実な事は言えませんが。

「あなたは誰です？」

「ポレポレ星人だ」

と、制服男は言いました。

「ああ、ポレポレ星人ですか。ポレポレ星は、確か地球から三二六光年離れたガス惑星ですね。地球へようこそ。私の友達が近くのにげへ星とペスペス星出身ですので、嬉しい限りです」

と、私は会釈しました。

制服男は顔を真っ赤にして、

「貴様、俺を馬鹿にしているのか？」

私は首を横に振り、

「いえ、アンポンタンにしています。頓珍漢にしています。猿にしています。犬にしています。ロリポップにしています。包装紙にしています。アップルパイにしています。ムシムシにしています。ポンポコポンポコにしています。」

制服男はますます顔を赤くして、

「馬鹿！ 俺は警察官だ！」

「いえ、審議官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、検屍官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、報道官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、税務官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、管制官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、裁判官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、財務官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、執政官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、法務官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、刑務官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、労務官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、独裁官でしょう」

「違う！ 警察官だ！」

「いえ、バンサンカンでしょう」

制服男は、顔を赤黒くすると、

「俺は警察官だ！ 何度言えば分かる？」

「私はアホですから、あなたが何度言おうと分かりません。アホは何度言われても初めて言われた様な反応を示します。何度言っても無駄です。アホに向かって何度も何度も何度も何度も何度も何度も言うのは馬鹿です。カスです。屑です。ウンコです。ゲロです。ウジムシです。ゲジゲジです」

「ふざけるな！ 貴様、事故現場から逃走しただらう？」

「いえ、妄想しました」

「違う！ 逃走したんだ！」

「いえ、抗争しました」

「違う！ 逃走したんだ！」

「いえ、奔走しました」

「違う！ 逃走したんだ！」

「いえ、戦争しました」

「違う！ 逃走したんだ！」

「いえ、論争しました」

「違う！ 逃走したんだ！」

「いえ、珍走しました」

「一々口答えするな！ 貴様を逮捕する！」

私は呆れました。

「あなたは救いようの無い馬鹿ですね。アホを逮捕してもどうにもなりません。不起訴処分になるでしょうから。不起訴処分でも、書類上の手続きはしなければならない。つまり、あなたは不起訴となると分かっているにも拘らず、貴重な時間をかけて書類を作成しなければならない。そんな無駄な事をやるのは馬鹿だけです。ま、それでも給料は貰えるから、いいんでしょうが。月給泥棒はいいですね、逮捕される事はあまりないですから。警察官が辺りにいたとしても、なかなか逮捕されない」

制服男は、腰ホルスターから回転式自動拳銃——とっくに生産が終了してしまっているニューナンプM60——を抜いて、私に向けました。

「てめえ、つべこべ言っていると射殺するぞ！」

私はますます呆れました。

「あの、アホを拳銃を脅しても何の効果もありません。アホは不滅なんですから。銃で撃ったくらいじゃ死にませんよ。そんな単純な事も分からないのですか？ やはりあなたは正真正銘の馬鹿です。アンポンタンです。唐変木です。頓馬です。ウリヨリヨです。ブンブンブンです。コンコンコロリです。もう少し違う方向にその努力を割いていたら、私のような立派なアホになれていたかも知れませんね。ま、アホは遺伝だと聞いていますから、どうあがいてもアホには到達出来ないのかもしれませんが。でも、準アホにはなれるかも知れませんよ。挑戦してみたらどうでしょう」

制服男は顔を真っ赤にして、

「うるせえ！」

と叫ぶと、ニューナンプM60の引き金を絞りました。

(パンッ)

大音響ではあるものの、何となく迫力の無い銃声と共に、三八口径の銃弾が秒速二〇〇メートルで銃口から排出されました。

馬鹿や、アンポンタンや、唐変木や、頓馬や、ウリヨリヨや、ブンブンブンや、コンコンコロリだと、そのまま銃弾を食らって落命するでしょう。

しかし、アホは不滅です。

鉛の塊如きで死にはしません。

私は手をスッと前に出すと、向かって来る銃弾をペシッと叩きました。

三八口径の銃弾は、相当頼りなかったらしく、私の軽い叩きで横に飛んで行ってしまいました。

制服男は、口を大きく開け、馬鹿みたいな表情で固まっていました。馬鹿そのものです。

馬鹿なので、私が銃弾を素手で叩き落としてしまった事実を飲み込めないようです。

馬鹿は現実を簡単に受け入れない傾向があります。馬鹿である由縁でもあります。

馬鹿は世界のゴミです。

カスです。

屑です。

ウンコです。

ゲロです。

ウジムシです。

ゲジゲジです。

馬鹿は一人残らず撲殺されるべきです。

絞殺されるべきです。

毒殺されるべきです。

扼殺されるべきです。

虐殺されるべきです。

薬殺されるべきです。

謀殺されるべきです。

悩殺されるべきです。

忙殺されるべきです。

捕殺されるべきです。

一人残らず死んだところで、誰も困りませんし。アホの様に不滅ではないので、簡単に殺せるでしょう。馬鹿に対し「死んでくれ」と要請するだけで喜んで死んでくれるかも知れません。誰か、やってくれないでしょうか。

「て、てめえ！ な、何をした！」

私は、死ねないと分かっているながらも、死ぬ程呆れました。

「あなたは本当に馬鹿ですな。見なかったのですか？ 銃弾を叩き落としたのです」

「ふ、ふざけるな！ に、人間が銃弾を叩き落とせる訳がない！」

私は頷きました。

「そうです。人間は銃弾を叩き落とせません。でも、アホなら出来ます。アホは人間を超越した存在ですから。そんな誰でも知っている事実すら知らないのですか？ 病院に行って、頭を見てもらった方がいいですよ。何なら、救急車を呼びましょうか？ 警察でもいいですよ」

「ば、馬鹿な事言うな！」

「馬鹿はあなたです。私は馬鹿な事は一切言っておりません。アホな事は散々言っておりますが。アホだから当然ですよ。アホだから、言う事は全て、一つ残らずアホな事なのです。アホなのに馬鹿な事を言ったらおかしいでしょう」

「わ、訳の分からない事を言うな！」

「アホが言う事は、馬鹿には理解出来ません。したがって、訳の分からない事に聞こえてしまうんですな。同じアホなら理解出来るのですが」

「うるせえ！ もう一回発砲するぞ！ 今度は何もするな！ 黙って射殺されろ！」

と、制服男は叫ぶと、もう一度ニューナンプを私に向け、引き金を絞りました。

(パンッ)

大音響ではあるものの、やはり何となく迫力の無い銃声と共に、三八口径の銃弾が秒速二〇〇メートルで銃口から排出されました。

制服男は、何もするなと私に命じましたが、私は無視する事にしました。当然でしょう。私はアホです。アホは他人の命令に一々耳を貸さなくても良いのです。馬鹿なら耳を貸さなければならないでしょうが。少なくとも、馬鹿の命令を聞くアホはいません。

私は、向かって来る銃弾に手を伸ばすと、またペシッと叩きました。

前回と同様、横に叩いたつもりでしたが、私はアホですので、同じ事が続けて出来ません。

銃弾は、来た方向へそのまま弾き飛ばされました。

「グワッ」

と、制服男は叫びました。

情けない奴です。弾を胸に食ったくらいで叫ぶのですから。馬鹿は何故被弾したくらいで一々みっともない悲鳴を上げるのでしょうか。アホだったら何でもない様に、平然としているでしょうに。

制服男は後方に吹っ飛び、背中から地面を打ちました。大の字に寝転び、ピクリともしなくなりました。

私は呆れて首を振りしました。

道路のど真ん中に大の字になって倒れるなんて、迷惑極まりないです。死ぬなら死ぬで、何故もっと場所を選んで死ぬ事が出来ないのでしょうか。

やはり馬鹿は馬鹿です。

他人に迷惑ばかりかけます。

私の様なアホは違います。他人に絶対迷惑をかけません。アホですので、他人にどうやって迷惑をかけるのか、やり方が分からないからです。

「どうか安全に昇天して下さい。では」

と、私は、10トントラック数十台に轢かれながらも尚道路のど真ん中で大の字に倒れている制服男に声をかけると、その場を離れました。